

野菊の墓

—— 映画文学人生論

原作：伊藤左千夫 (1906) 「ホトトギス」
監督：木下恵介 (1955) 脚本：木下恵介
出演：民子 有田紀子 撮影：楠田浩之
政夫 田中晋二 音楽：木下忠
政夫の母 杉村春子
老人 笠智衆

民さんはそんなに野菊が好き……
道理でどうやら民さんは野菊のような人だ

伊藤左千夫『野菊の墓』は「ホトトギス」第九巻第四号（明治三十九年一月一日発行）に発表された。同誌同号には夏目漱石『吾輩は猫である』第七章と第八章）も載っている。

日本近代文学史における涙の文学と笑の文学の代表作が俳句雑誌「ホトトギス」の同じ号に併載されたのは奇しき縁ではないか。

当時の「ホトトギス」では山会と称して、散文の勉強会が行われていた。山会で『野菊の墓』を作者が朗読したことがある。

語り手の政夫は、矢切村の旧家の出身で、後の月の時分になると、子供の頃、仲良しだった従姉の民子を思わずにはいられない。

明日は宵祭という日の朝、政夫と民子は母の命令で山畑の綿を採ってくるようになった。その途中、政夫が野菊の花を一握り採ってやると、民子は「私は野菊の生まれ変わりよ」といって喜ぶ。

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」。

それほど仲良しの二人だったが、政夫はまだ十三歳数ヶ月、二歳年上と民子と結婚するわけにはいかない。民子は余儀なく他家に嫁入りし、死んでしまった。

これを朗読しながら、伊藤左千夫はいく度も泣いたという。作者が泣くほどの小説だから、読者



野菊の墓

映画文学人生論

も泣く。多くの読者を感動させた。

その一人が夏目漱石。「野菊の花は名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しくて、野趣があつて結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい」という書簡を左千夫に送っている。

漱石にもロマンチックな恋にあこがれる傾向があつたようだ。しかし、その年、朝日新聞に連載した小説の主人公は野菊のような女ではなく、クレオパトラのように驕慢な女だった。

『野菊の墓』と『虞美人草』はどちらもヒロインの死で終わるところは同じだが、死に至る道すじはまったく違う。『野菊の墓』の民子は、好きな人に添うことができない運命を嘆きながら痩せおとろえ、最後は運命を受け入れて死ぬ。『虞美人草』の藤尾は虚栄の毒を仰いで斃れる。

漱石はわざわざ東京帝国大学の教師をやめて、朝日新聞に入社し、職業作家としての第一作を執筆するにあたって、なぜ野菊のような可憐な女ではなく、虞美人草のように驕慢な女をヒロインに選んだのだろうか。

「藤尾という女にそんな同情をもつてはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが、大人しくない。徳義心が欠乏した女である。あいつをしまいに殺すのが一篇の主意である」と、漱石は小宮豊隆宛書簡で書いているが、朝日新聞には藤尾の死に抗議する読者の手紙が殺到したという。

野菊一輪手帳の中に挟みけり 漱石